

青空白雲

表紙イラスト…みかみん

姫騎士

ジュリア

魔剣の姦計

試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『姫剣士ジュリア 魔剣の姦計』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



姫剣士

SWORD PRINCESS JUTKA

魔剣の姦計

青空白雲

表紙 / みかみん

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ジュリア・フォン・シュビレーヌ

エメラルダ王国の姫。美しい美貌と強い正義感を持ち、しばしば身分を隠して街を視察している。不届き者がいれば、剣でこらしめることも。

ユーア

ジュリア専属の従者。ジュリアとは幼い頃からの付き合いで仲が良い。

トマス

ジュリアの旅に同行する従者。

「……というわけでして、来年度の予算はこのような形になっております」

老大臣がボードにペンを走らせた。

「ふむ。そういう内容でいいんじゃないですか」

「私も賛成です」

他の大臣らがうなづく。

「ちよつと待ちなさい」

安堵の空気が流れる中、メゾソプラノの声が響いた。大臣らがいつせいに声を発した少女に目を向ける。

ジュリア・フォン・シュピレーヌ。エメラルダ王国の後継ぎたる姫だった。薔薇を模したティアラを載せた長い金色の髪は、カールが掛かり、きらきらと輝いている。卵形の顔は目鼻立ちが整い、見る者を魅了せずにおかない美しさに溢れていた。美しい柳眉、くつきりとした二重まぶたに、長いまつ毛、深い青の瞳。鼻筋は綺麗に通る、高く形のいい鼻の頭を作っている。唇は淡くルーージュを塗っただけのパールピンク。

サーモンピンク色のドレスはワンピース型で、半袖であり、細く白い腕が伸びている。ふつくと豊かに胸元は盛り上がり、ウエストは白いベルトで締められている。そこから、花が咲くように豪華にロング丈スカートが広がっていた。

「やけに建築費に予算を割いているようだけど、どういうことかしら？」

「はい、それはあの……、国民の憩いの場となる国立公園ですとか、国の歴史・文化を後世に伝えるための博物館ですとか、そういうもののために……」

老いた財政担当大臣はにつこりほほ笑みながら、説明する。

「それは今聞いたけど、すでに国民公園はあるじゃないの」

「はあ、もうだいたい古くなっておりまして」

「確か星暦三八〇年に作ったのよね。まだ十年弱じゃないの。そんなに古くなっていないはずよ。工事はどこに発注するつもり？」

「入札前ですし、まだ決まっておりませんが」

手揉みする老大臣に厳しい視線を送りながら、ジュリアは問う。

「エビスコスのところかしら？」

「あ、いや、その……」

「爺やに探りを入れさせようかしら。ここ最近、エビスコスのもとへの工事発注が多いわよね。そういうえば、前の大臣・デプスはエビスコスに再就職が決まったみたいね」

姫は一層鋭い視線を老大臣に向けた。

「官製談合じゃないでしょうね」

「滅相もございません。そのようなことは一切ございません。法に基づいた正しい入札となっておりません」

財政担当大臣はハンカチで額をぬぐいながら、作り笑いを見せる。

「前大臣も実情はよく知っておりますから。建築業界も今は数が減ってきています。信頼できるところは、エビスコスのところしかございません」

エビスコス・ビルディング。国内ナンバーワンの建設業者である。会長はその名の通り、エビスコス、年齢五十六の恰幅のいい……といえは聞こえはいいが、肥りすぎの男である。「前の建設省の高官も省を辞めたあと、何人かエビスコスに入ったわね。そろそろ調べないかね」

「あの、いえ、エビスコスは働きやすいのです。だから――」

ジュリアは素早く手元にあったパソコンを操作した。そばで大臣らが青い顔をしている。「全く分かりやすい天下りね。再就職の見返りとして、仕事を与えると。わたしが調べたところ、ルイズの建設会社もいい仕事をしているわ。規模は小さいけど、やましい噂はないし、仕事に遅れはないわ。エビスコスは離職率が高いけど、ルイズは定着率が高い。これも側近の者に調べさせたんだだけ――」

さらに、ハンディパソコンに資料を映し出す。大臣らの手元にあるミニコンピューターのモニターにも映し出されているはず。

「エビスコスは収益が国内最大にもかかわらず、臨時契約社員が多すぎる。ルイズの社員の十パーセントにも満たない臨時契約が、エビスコスは三十三パーセント。売り上げは

ルイーズの十倍以上なのに。ひとを次々首切つて、天下りは受け入れるつてわけね」

「いえ、まだエビスコスに決まったわけでは。ええ、これから入札がございます」

「入札前にいろいろ動いていることは知っているわ。建設担当大臣の部下たちが手を回しているみたいね」

きつ、と睨まれ、こちらも肥えた建設大臣が肩を縮める。

「それだけじゃないわ。新しい学園の理事長は教育科学担当大臣の縁戚。今は国も景気が厳しいというのに、あからさまなコネ就職。あなたたち——」

ジュリアが立ち上がる。ふわり、とロングスカートの裾が揺れた。

「私利私欲のために動いているのが丸分かりよ！ まだまだあるわ。国内農産業は低迷を続けている中、さらに輸入重視政策を決めたそうね。その日は弟が会議に出たらしいけど、農民が死ぬ思いでいるのが分からないの？ いくらルート帝国が強大だからって、帝国の言いなりになりすぎよ！」

「姫様。どうか、落ち着いて下さい」

青くなりながら、侍従官が姫を座らせようとする。

席で、大臣らが顔を見合わせている。みな、苦々しい表情だ。まさか、政治会議に参加して間もない姫が、ここまで内情に詳しいとは——。そう動揺しているようだった。

と、そこへ、議会議室に大臣補佐官が入ってきた。

「ちよつと。今議会中なのよ。勝手に入ることは許さないわ」

「すいません。緊急の用件です」

四十がらみの補佐官は愛想笑いを浮かべ、健康保健大臣に耳打ちする。と、大臣は目を見開き、顔を強張らせ、静かにうなずいた。そして、隣の経済金融大臣に囁きかける。

「探していた剣が見つかった。奴らと取引すれば――」

経済金融大臣が緊張した顔をし、ちら、と姫のほうを見た。

「何？ 剣がどうかしたの？」

「い、いいえ、なんでもございませぬ。気になさらないで下さい」

「おかしなこと、企んでいるんじゃないでしょうね？」

「滅相もない……」

大臣をひと睨みし、ジュリアは話を続けた。

「国の税金はどんどん増えているわ。十二兆三千三百億エメラルド。去年より千五百億も増えている。なのに、無駄な工事を繰り返して……つ。公園や博物館だけじゃない。道路もよ。充分すぎるくらいに道は整備されているというのに、どうということなのっ」

場が静まりかえる。誰も反論できないようだ。

「今日はとりあえず、ここまですておきましょう。徹底的に爺やに調べさせるわ。まだ膿が出てきそうですからね」

「そう急くな。俺だって愉しみたいんだからな。安心しろ、貴様らにも回してやる」
なんということだろう。わたしは今から全ての妖魔たちに犯されてしまうのだ。最悪の初体験だ。

（悔しい悔しい悔しい！ 絶対に大臣たち、許せない！ わたしをこんな罠に嵌めて……。帰ったら叱りとばしてやる。謀反よ、反逆罪よ）

ぐ、ぐ、ぐりぐり、ぐりり。

妖魔の極太ペニスがいよいよ半分近くまで埋め込まれてきた。圧迫感がすごい。子宮が押し上げられ、つぶれかけているのではないかと思う。

「どうだ？ まだ痛いだけか？ 少しずつ、よくなってくるぞ」

三本角の妖魔はニタニタ笑いながら、盛んに腰を突きあげてきた。一回、二回、三回……。極太ペニスが肉襷を擦りあげ、子宮底を打ってくる。それは、ただつらいだけだった。破れた処女膜の痛みは激しく、鼠径部に滴る血の温かさが気持ち悪い。

（早く終わって！ お願いだから、早く終わって！ こんな仕打ち、もう耐えられない！
…）

思わず、青鬼の肩に手を回し、爪を立てた。そうしないと、魔幹に身体ごと突きあげられ、吹っ飛ばされてしまうような錯覚を覚えてしまうからだ。そんなジュリアを見て、鬼は下品な笑みを浮かべる。さらさらの長い黄金色の髪を撫でて、頬に口づけてくる。むわ

あ、と生魚のような口臭が広がる。

「すぐに女の悦びを味わわせてやる。ぐひひ。ほれ、ほれほれ」

「ぐ、ぐ、ぐふ、ぐいい……。は、やく、終わって……。もう解放して」

「まだまだだ。お愉しみはこれからさ」

鬼はジュリアを地面に仰向けにした。正常位で牡腰をマックススピードで躍らせてくる。ふたつの乳房が、たぼんたぼんと円を描くようにダンスし、互いにぶつかりあう。薄朱乳首の残像が鬼の目に映る。

「あうっ。あう、うう、あううう……。い、痛い、痛いいいい」

収まりきらない魔幹の抽送に破れたばかりの処女膜が擦れて、まるでヤスリでしごかれて燃えるような痛みが発生した。しかも、今まで男のモノを受け入れたこともない肉膣が尋常ならぬ太さのペニスの蹂躪にあい、無理やりに拡張されて、鈍い痛みが襲ってきた。

そして、どこか熱い。どこが熱いのか、よく分からない。秘部が熱いのだろうが、腰も、背中も熱かった。

「くおおお。おい、お前も腰を振るんだ。肉奴隷らしく俺様に奉公しろ」

「そ、そんなこと、できない。無理よ」

恥ずかしいというのも当然あるが、腰が麻痺したように動かない。ひたすら熱感は覚えていたのだったが……。それに、意識が膣洞の疼痛に集中してしまっ、腰を振るところ

ではない。

「愚か者め。これから仕込んでやろうというのに。まあいい。たくさん抱かれていれば要領を得るだろうさ」

ぐにぐに乳房を揉みたててくる。乳房の奥に鈍痛が走る。

(もういや。死んでしまいたい……。わたしの何がいけなかったの?)

欲情まみれになり、目を血走らせ、醜く小鼻を膨らませて、今にも涎を垂らさんばかりの表情で、腰を使う妖魔に、もはや憎しみも薄れかけている。ただただ、つらく、悲しく、虚しい。姫として、全力を挙げて政治に取り組んできた結果がこれとは……。もはや、誰も信じられない。信じたくもない。

(姫の地位など捨ててしまいたい。もう解放されたい……)

まだなのか。まだ終わらないのか。三本角の青鬼は、はあはあ息を乱して、なおも牡腰乱舞をきめてくる。奥の奥まで亀頭肉でノックされ、かきまわされ、熱い痛み、鈍い痛み、痺れを覚え、胸は吐き気で苦しい。恐怖と絶望と屈辱に、ジュリア姫の顔は青白い。

「ぐおおお……。そろそろだ。お姫様、あんたのなかにぶちまけてやるぜ」

その言葉に、目を見開いた。混乱した理性が叫びをほとばしらせる。

「いや、それだけはっ。お願い、外、外に……。外にいいいい」

魔の子種を宿してしまうかもしれない。それほど恐ろしいことはない。自分が人間では

なくなってしまう。妖怪に墮ちてしまう。

「だめだ。ふへへへ。お姫様、あんたを孕ませてやるぜつ。おらあああ」

次の瞬間、熱い衝撃を覚えた。それは圧倒的な量だった。

どびゅどびゅ、どびゆるる、どびゅ、どびゅ、どびゆるるるるるるるつ。

「いやあああああああああああつ」

胸を反らせ、顔をいやいやと横に振った。あまりのおぞましき、不気味さに、吐き気がこみあげてくる。背筋が寒い。

「ふう。最高だったぜ、お姫様。さあ、次だ」

三本角の鬼が身体を離すと、勢いよく虎頭の妖魔が襲いかかってきた。この妖魔も、パンツ一枚だけだ。そのパンツを脱ぎおろし、太い肉幹を突き入れてきた。

どんっ、と身体ごと押し上げられるような衝撃を覚えた。「あううう……」とくぐもつた声が漏れる。

さらには、左右から次々に妖魔が襲いかかる。ワニそっくりな身体を持った二足歩行の妖魔、顔も身体も狼男そのものの妖魔、顔・身体は人間そっくりだが、妙に肌が紫がかった小男など……。もはや、それは地獄絵図だった。

鼻をつまみたくなるような激臭が辺りに立ち込めている。腐った水を溜めた花瓶のような匂い、生魚が腐敗しかかったような臭気……。嗅いだことはないが、死肉のような臭い

もあつた。

「いや、やだ、やめて、やめてえええええ。わたしが何をしたというのっ」

ワニ妖魔に乳房を揉みほぐされ、長い青紫の舌で乳首を舐めまわされる。生モノが腐敗したような唾液臭に、酸っぱいものがこみあげてくる。一方、右乳房は狼男ががつついてむしゃぶつてきている。ざらついた舌で乳肌や乳首を舐められて、奇妙な熱を覚えた。

さらに、紫の小男はジュリアの顔にキスの雨を降らし、どす黒い肥大舌で素肌を舐めてくる。強烈な口臭に、口呼吸を盛んに繰り返す。

姫剣士の脚を抱え、べろべろ舐めてくる河童、ジュリアの陵辱される様子を眺めて自慰に励む天狗男……。うなり、悶え、あえぐ妖魔どもの声に、耳をふさぎたいが、それもできない。他の妖魔に両腕をしっかりと拘束されているからだ。

「ぐおお、最高だ、たまらん。人間の女をやるなんて何百年ぶりか。う、う、うおおお」
虎頭の男は目をぎらぎら光らせ、明るい黄色に覆われた頭から汗を滴らせて、盛んに牡腰乱舞させてくる。ガツガツ掘りかえされるたびに、肉褻が熱く燃える。疼き、微妙な痛みが走り、その中で、わずかに切ない感覚が芽生えては広がっていく。

(あ、ああ、だ、だめ、だめえ。おかしくなるっ……)

人間のそれよりもひと回り大きなサイズの魔幹に攻撃され、徐々に快楽熱が高まっていく。気持ちはいい。こんな感覚は初めてだ。なんだか熱くてくすぐったくて、切なくてたま

らない。亀頭肉が膣奥をうがつたび、ビリッと電撃が襲いかかってくるような感じがする。電撃の余波は子宮にまで及び、ジクジク疼きながら、溶けていくかのようだ。

「おい、早く替われよ。俺、もうたまらん」

ワニ妖魔がせかす。

「うるせえ、まだまだ愉しみたいんだ。もう少し待ちな。ぐへへ、お姫様のキツまんはたまらねえよ。うお、カリに絡みついてきやがる」

彼女を抱えおこし、騎乗位に移る。

「おい、スケベにケツ振ってみろよ。少しは気分が出てきただろ？」

虎男がニヤニヤとお尻を叩いてくる。

（なんとか早く終わらせるしかないわ。あと何人にされるのか分からないけど……）

妖魔の胸板に手をつき、おずおずと腰を揺する。

「もつとだ。もつといやらしく腰を振りやがれ！」

バチ、バチ、パチーン。

「分かったから、お尻、叩かないでっ」

ジュリアは血を吐く思いで叫んだ。酷い屈辱に、涙がなおもこぼれる。お尻をぶたれたことなど今まで一度もない。

女腰振りを少しずつ加速させていく。何回も何回も、逆ハート形の豊臀を上下させた。

細胞ひとつひとつが焦げつき、肉がとろとろチャーシューのごとくに柔らかく溶けていく。目の前で激しく火花が散り、星が瞬き、甘美きわまりない官能熱に漂う。豚面男が射精した。

どびゅびゅびゅびゅゆるるるる。じゅぶう。

地面に転がされた。仰向けになり、M字開脚で秘華も尻穴も披露する。

三本角の青灰鬼がひざまずき、唾で指をぬめらせ、人差し指と中指で菊穴をほじっていた。絶頂のあとで、理性がうまく働かない。何がなんだか分からない。妖魔どもの向こうに広がる青い空が遥か遠くにかすんで見える。小鳥の鳴き声が聞こえた。

「今度はこっちだ。ケツ穴でハメてくれる。肉奴隷の証を刻印してやる」

青鬼の言葉に、寒気を覚えた。

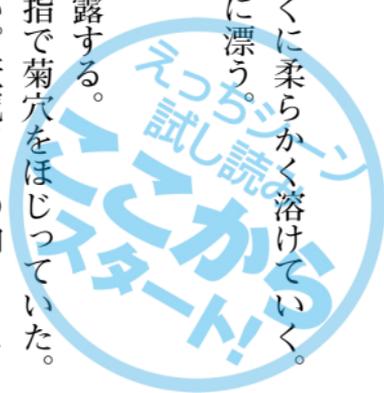
（そ、そんな……お尻の穴だなんて。気が狂っている）

しかし、反撃する意欲も湧かない。ただただ、心地いい倦怠感に身体が麻痺している。二本の指は菊門をこじあけてくる。

「ん、ん、んうう。な、何するの……？」

「指でほぐしてやらないと入らないからな。お前だって痛いのは厭だろう？ 俺は優しいんだ」

指が第二関節まで挿入されてくる。気持ち悪いというか、違和感が強かった。ひたすら



便を排出する器官に何かを埋め込まれるのは、この器官の本来の機能に反している。心が落ち着かず、おかしな気分になる。

（お尻でエッチするなんて、聞いたこともないわ。妖魔どもの趣味なのかしら。怖い、怖いわ……）

どこかひとごとのようにも思える。自分が今からさらに苛烈な陵辱を加えられる、そのことに実感が湧かないといおうか……。散々の陵辱で頭がおかしくなったのか？ 四肢を投げ出し、ジュリアはその時を待つ。どうぞ、抵抗などできはしないのだから。こいつらを斃すことなど、普通の人間にできるはずもないのだから。ならば、身を任せよう。耐えることには慣れてきた。

「そろそろいいかな。じゃあいくぞ。すぐによくやるぞ」

やがて、三本角の青灰鬼が目を血走らせ、犬歯を唾液で光らせながら、肉幹をあてがってくる。

「ん、ん、んうう……あうう。痛い、いや」

膨れた亀頭玉が菊門をこじあけてくる。無理やり拡張される息苦しさで違和感に、胸を上下させる。脂汗が額にびっしり細かい粒を浮かせた。

「ふん。厭がっているんじゃないぞ。ケツ穴奴隷にしてもらえるんだ。光栄に思え」

鬼はなおも亀頭を埋め込んでくる。いちばんつらいカリのでっぱりの挿入が続いてくる。

排泄器官への異物の挿入に、ジュリア姫は顔を青くさせた。まぶたを閉ざし、きゅ、とマシュマロ唇を噛みしめた。地面に放り出された手を握りしめる。爪が痛いくらいに手のひらに食い込み、爪が白くなる。

ぐ、ぐぐ……。ぐ、ぐい、ぐい。

カリがついに菊門をくぐりぬけた。あとはスムーズだった。魔幹が根元まで直腸管に収まった。

「あ、あふつ……く、苦しい。ああ、なんなの、これ」

ジュリアは目を見開き、青鬼を見た。明るい空をバックにして、青鬼は歓喜に顔を歪めていた。

息苦しい。内臓が押し上げられるのではないかと、そう思う。胃の内容物が逆流しそうな感覚がある。呼吸するのも大変だ。

「さあ、いくぞ。せいぜい楽しみな。すぐにケツでしかイケなくなるぞ。ケツにハマて下さいとお願ひするようになるんだ。ぐははははは」

征服の喜びに酔いしれて高笑いすると、青灰鬼は腰を躍らせてくる。

「あ、あぐ、ふ、や、やだ、そんなに、しない、でえええ。あ、あ、ああああ」

魔幹を押し込まれると、臓器ごと押しやられる感覚に襲われ、幹が引かれると、直腸ごと持っついていかれそうになる。中にわずかに残っているのかもしれない便がひり出されてし

まうかのような、なんとも居心地が悪い気分がして、いたたまれない。

ただただ、違和感があるだけだ。こんな行為のどこが気持ちいいというのか。

「どうだ？ よくなってきたか？ 素直に言ってみろ」

「あ、あうう……よ、よくなんか」

青鬼はにや、と嗤った。ぽたぽた汗の玉を姫の滑らかなおなかに滴らせて、腰をゆつくり使う。二秒に一回のテンポで数センチのスライド運動をしかけてくる。すると、亀頭エラとカチに擦られている個所が微妙な熱をこもらせてきた。初めは、小さな熱感の粒子だった。それがいくつにも増え、拡大してきた。

（な、なんなの、これ。おかしい、おかしいわ！）

ジュリアはカチカチ歯を鳴らす。自分がお尻で感じるような変態に堕ちてしまったなど、考えたくもない。

だが、何十回も抽送されると、直腸管全体に熱が及んできた。その熱は甘美で切ない。熱したチョコレートのように甘く優しく、腸管をとろかしていく。甘美熱感は、腰とその奥の骨、筋肉にまで広がり、ピリピリと快感信号を発する。

「あ、あ、あ、ん、あ、あ、ん、いや、こんなの、わたしじゃ……ない」

「お前だよ。お前の本性さ。くひひひ。淫乱牝豚、それがお前の本当の姿だ。これからは俺たちが毎晩遊んでやる。どうだ、嬉しいだろう？」

「い、や、そんなのっ……」

しかし、否定しようとするればするほど、快感熱は温度を増していく。腰だけではなく、脊髄にまで高温快感は広がって、脳天にまで届く。気持ちいい。気持ちよくてたまらない。何度もまぶたの裏で白い火花が散る。ビリビリ、と音がしたような気さえする。

手も、脚も、指の一本一本までが、液化していくかのよう。すさまじい快感のうねりに、ジュリアはいっしょにはしたなくあえいでいた。

「いい、いいの、あ、あ、ん、いいの、お尻……うんちの穴、気持ちいいのおおおお」
「ぐははははは。そうか、そうか。気持ちよくてたまらないか」

三本角の青灰鬼はなおも牡腰ダンスをきめてくる。

直腸深部を突かれるたび、劇悦が雷鳴のごとく襲いかかる。魔幹が引くと、便を排出するにも似た感覚とともに、腸壁細胞が甘く鳴きながらじゅくじゅく溶けていく。次々と快感に見舞われ、ジュリアのまともな理性は吹っ飛んでいく。

もはや、姫の地位も国や民のことも、頭にはない。ただただ、この異次元の強烈なる肉悦に浸っていたい。ずっと、ずっと……。

「もっと、もっととして、突いてえ。うんち穴、ぐりぐりい……してっ。あ、あ、あ、あ、あ、イキそう、イク、またイク。うんち穴ぐりぐりされてイクうううううううううう」

ぶちぶち、と脳細胞がバラバラになるような感覚が襲った。身体ごと溶けていき、意識

が飛ぶ。意識を取り戻しても、容赦なくアクメがやってくる。

「ひ、ひぐ、ぐふ、ぐくううう……。イクイクイクイクウ。うんち穴、ちんぽで犯されてイクううううううう」

釣りあげられた若鮎のごとくに、地面の上で薄桃色上気した若い女体をひきつらせる。たぽたぽん……と美巨乳がゼリーののように揺れる。汗の玉がいくつも、胸の谷間に流れ落ち、陽光にきらめいた。

「くああああ、イクぞ、出してやるぞっ。臓器まで孕ませてくれるっ」

青灰鬼は叫び、狂ったように腰をぶつけ、勢いよく射精した。

どぴゅぴゅぴゅるるるる。どぴゅ、どぴゅぴゅ、どぴゅるるるるうううう。

熱い魔精シャワーを浴び、またもアクメに見舞われる。汗に濡れた肉体をひきつらせた。濃厚な汗の匂いとオーデコロンのかぐわしいフレグランスが空気に満ちていく。

そんな姿を見て、他の妖異どもがおとなしく我慢できるはずもない。次々と襲いかかってきた。天狗男が仰向けになり、騎乗位でジュリアは結合され、アヌスは背後から犬男がつながっていく。さらに、右からも左からも様々な異形がまとわりついてくる。馬面のひよろひよろした男が乳房に手を伸ばし、河童男が横に立ち、背中からお尻を撫でて舐めまわす。

「あううううう。イク、またイキそう。あ、あ、あ、気持ち……きぼぢいいいいいい」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>